

異学年交流を考慮した小学校の試み

日大生産工(院) ○小峰明

日大生産工 曾根陽子

1、研究の背景

少子化が進行し、家庭や近隣で異学年の子供たちが接する機会が少なくなっている。小学校は異年齢の子供達が交流出来る貴重な場であるにも関わらず、心身の発育状態を考慮して低学年、中学年、高学年と単純に配置されるものがほとんどである。

異学年交流を考察した設計課題例(図1)を確認するため、異学年交流が意図された教室配置である群馬県にある高崎市立桜山小学校(図2)を調査した。

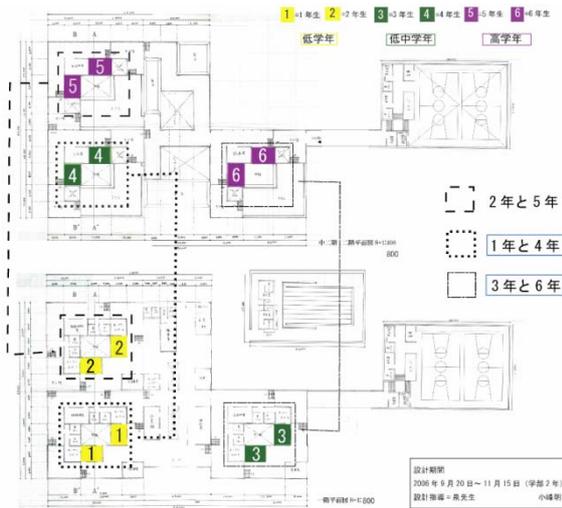


図1 異学年交流を考察した設計課題例(設計小峰明)

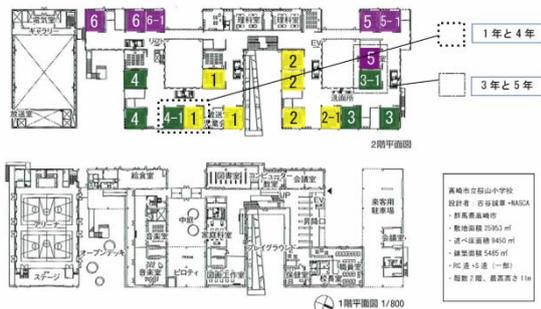


図2 高崎市立桜山小学校平面図

2、高崎市立桜山小学校に関する調査

①当該の学校設計した古谷誠章研究室(早稲田大学教授)におけるヒヤリング(2010年1月6日)の結果以下の事が分かった。(質問内容:異学年の教室が近ければ近いほど[図3]異学年交流は多くなるか。)

(1) 異学年の教室の遠近が異学年交流の多少には直接的に関係がない。

(2) 上の学年の児童は下の学年の児童のクラスを通過して教室に行く過程で展示物を見るなどという行為も異学年交流の1つとなっている。

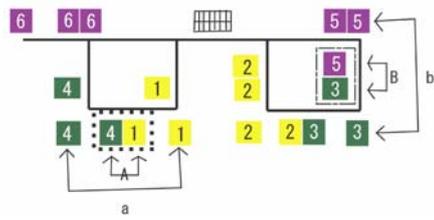


図3 質問内容補足図

②高崎市立桜山小学校でのヒヤリング(2010年2月25日)の結果以下の事が分かった。

(1) 全学年が同じ階で生活しているため、低学年の児童からも挨拶される、体育終わりの女子児童が側転を披露してくれるなど大人にも物怖じしていない印象を受け、全学年が同じ階で生活する中で異学年交流が促進している。

(2) 副校長殿が朝礼の時間を使って1, 2年生を5, 6年生の教室まで案内することで低学年の行動範囲を広げさせ、展示されている作品などを鑑賞することが異学年交流にもなると述べていた。

3、小学校分析

高崎市立桜山小学校での調査を踏まえ昨年度も分析した「新建築」1999~2009年までに掲載されている33校と「学校を変えなくちゃ!!」(監修/東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻教授/上野淳)に記載されている7校を合わせて40校の小学校を分析した。

Attempt of elementary school that considered different school year exchange

Akira KOMINE, Yoko SONE

昇降口から普通教室に行くまでの動線や異年齢同士の普通教室を結ぶ動線を簡略化し、各階平面図を重ね合わせ、図式にした。(図4)結果は一型、コ型、L型のような一文字型やその発展したプランである学校が26校となった。

(図5)ほとんどの学校でオープンスペース(以下OS)等の配置がされていたが、OSの配置が形式化されている学校がほとんどであった。図5に見られる様なh型、E型、S型、T型、T型に加え、一型、L型、コ型を組み合わせる事例が14校で採光や通風などの居住性も高められる工夫がされていたと考えられる。

また、この事例の中で異学年の教室を近くに置く、異学年の教室の前を通過して教室に行くなど異学年交流の可能性があったと思われる学校は5校であった。

いには野小では1年と2年の教室が近くに配置され3年と5年の教室も近くに配置されていたが、4年と6年は個々の学年に重きを置いていると考えた。(以下12・35・4・6のように記載)美浜打瀬小は1・24・3・56の学年の組み合わせ、桜山小は135・246の学年の組み合わせ、伊那東小は12・36・45の学年の組み合わせ、矢野南小は16・25・34の組み合わせと分類された。

1年から6年までを12・34・56や123・456など学年の区切りは違うが低・中・高学年に区切る学校が15校であった。図面に学年が記載されていない20校もそのほとんどが上記の様に配置されているものと考えられるため、40校中35校が単純配置されたものと考えられる。

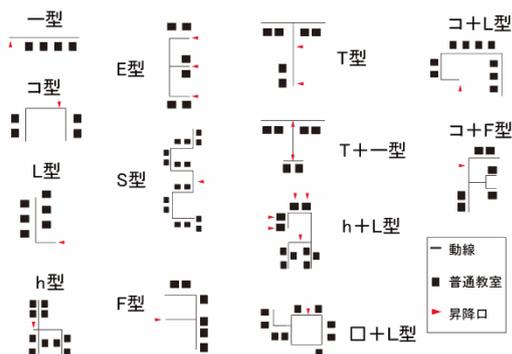


図4 動線を簡略化した図式モデル

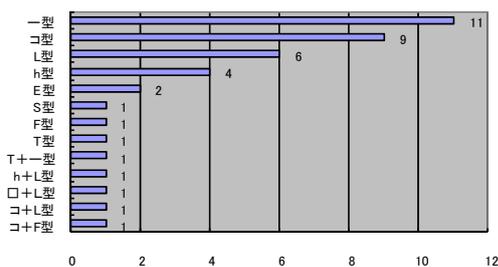


図5 動線パターンによる内訳

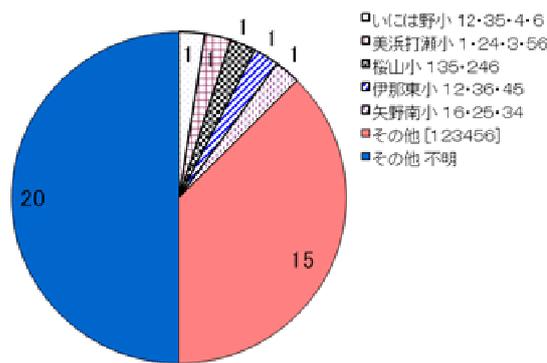


図6 学年別の教室の組み方

4、まとめ

ヒヤリング調査によって、異学年の教室の遠近が異学年交流の多少に直接的に関係がないことがわかったが、副校長殿が述べていたように、朝の朝礼の時間を使って1、2年生を5、6年生の教室に案内させることで普段の行動範囲を広げさせ、展示されている作品をお互いに鑑賞することで異学年交流はますます促進されると考える。この様に設計者だけでなく、学校側とも連携しての試みが必要不可欠だということが分かった。

近年では少子化により、一人っ子も増えてきて異年齢の児童と触れ合う機会が減っている。分析した先進事例であろう学校建築40校を分析した結果、設計の立場から動線計画に異学年交流を意図する配置にする、異学年の教室の中間領域にお互いが溜まることの出来る空間を配置するなどの配慮が必要だということが分かった。

「参考文献」

- 1) 「新建築」1999年6、7、8、12月号
- 2) 「新建築」2000年4月号
- 3) 「新建築」2001年12月号
- 4) 「新建築」2002年8月号
- 5) 「新建築」2003年6、7月号
- 6) 「新建築」2005年5、7、9月号
- 7) 「新建築」2006年4、6、9月号
- 8) 「新建築」2007年5月号
- 9) 「新建築」2008年6、9月号
- 10) 「新建築」2009年7、9月号
- 11) 「日系アーキテクチャ」2009年7-13、p20~25
- 12) 「GAJAPAN」2007年11-12
- 13) 「GAJAPAN」2009年7-8
- 14) 学校を変えなくちゃ!!編集委員会「学校を変えなくちゃ!!」金田泰男、2002年、p66~101
- 15) 上野淳「学校建築ルネサンス」鹿島出版会、2008年p100~182
- 16) 理工図書「建築計画を学ぶ」浅野平八、2005年、p229-p245